

エジプト・ナカダ文化における

泥岩製品からみた物資流通システムの発展

竹野内 恵 太

1. はじめに

エジプトの先王朝時代（前五〇〇〇—三〇〇〇頃）は、急速な社会の複雑化が認められ、初期国家の形成が著しく進展した時期である。この社会変化を刺激した要素には、集団間・地域間の階層化であったり、工芸技術の発達や専業化、外部地域との交易が挙げられる。中でも下ヌビアや南レヴァント、北シリアなどナイル川下流域の外部地域との交流・交易は、紀元前四千年紀の間に徐々に活発になり、その影響の痕跡を随所に見ることができる。こうした外部地域との流通・交易論は、初期国家形成の脈絡の中に位置づけやすく、国家誕生の要因論の一つとして語られて

きた。ナイル川下流域とその外部地域という巨視的な地域設定は、中心と周縁という理論的枠組みの中での議論を可能にしたのである。

こうした国家誕生の担い手となったのは、上エジプト地域で生成されたナカダ文化である。ナカダ文化は、ナイル川下流域においていち早く社会の複雑化が進行し、続く王朝時代の母体として発展した。では、当時ナカダ文化の核地域である上エジプト地域内部では、どのような物資の動きがあったのだろうか。先王朝時代の後半頃（前三五〇〇—三二〇〇頃）まで、当該地域は政治的に自立した組織体が発達していたことから、その間で物資や情報のやりとりが活発であったことが予想される。しかし、これまで交換・交易論や流通論の多くは外部地域との大規模な交易や

上下エジプト地域間の物資のやりとりのみがクローズアップされ、上エジプト地域圏内における物資の流通については具体的な分析や議論が避けられてきた。

小論では、先王朝時代の上エジプト地域内の諸遺跡から出土した泥岩製品^①、特に泥岩製パレットを中心に分析を行う。原産地が限られる泥岩製品は当時の交換物資となっていた可能性が高い。よって、小論では泥岩製品の分布状況を通して当該期の物資流通システムの一端を論じてみたい。

2. ナイル川下流域の交換・流通と地域統合

エジプトの先王朝時代は、諸地域が文化的・政治的に統合を果たす過渡期に位置づけられる。ナカダⅡ後期頃までには、下エジプト地域へナカダ文化の人間集団とともに埋葬習慣や土器製作技術などが拡散し、上下エジプト両地域の物資文化は統合を迎える。この現象を一般的にナカダ文化の波及 (Nagadan Expansion) と呼ぶ。一方で、この統合過程の背景には、両地域間を結ぶ流通ラインの存在があった。

ナカダ文化に先行するバダリ文化期の早い段階では、カウ遺跡からパレスチナ産の四把手付き壺が出土している

(Brunton 1927)。この土器は、おそらく下エジプト地域のデルタ地帯を介して上エジプト地域へもたらされたと考えられている (Watrin 2003)。さらにフリードマン (Friedman, R) によると、いくつかのバダリ文化期の墓からは非在地系土器が出土する (Friedman 1999)。この土器の製作技術や表面調整、器形は、同時期のデルタ地帯西部のメリムデ文化期あるいはブト遺跡第一層に見られるものと類似するという。後続するナカダ文化期のⅠ期～Ⅱ期前半にかけて、下エジプト地域ではマアデイ遺跡、上エジプト地域ではナカダ遺跡という主要なセンターが成立する。上エジプト地域にはマアデイ遺跡で製作された玄武岩製容器が諸遺跡から出土し、交換財であったことが指摘されている (Mallory-Greenough 2002)。この玄武岩製容器と対向するように、下エジプト地域では泥岩製パレットや波状剥離ナイフが数点見られる。上下エジプト地域間の交流は、諸遺跡出土の非在地系遺物の増加を指標として、徐々に緊密になっていく。

上下エジプト間の交流がさらに活発になるのは、ナカダ文化期のⅡ期後半に入ってからである。当該期を境として、ナカダ文化は北方へ拡散し始め、上下エジプト地域の埋葬習慣や物質文化が混合した遺跡が営まれ始める。また、土器を中心とした南レヴァント産の交易品がデルタ地

帯東部を介して、大量に上エジプト地域へもたらされ始める。

また、グイヨー (Guyot, F) は、ナカダ文化の波及過程を非在地系遺物の存在から整理し、その発展段階を交換メカニズムの変化に基づき三時期に区分している (Guyot 2008)。第一段階 (ナ

カダ文化Ⅰ期) では、隣接遺跡から隣接遺跡へ任意に送られてきた共同体外部の製品を受容するのみであり、組織性の低い交換メカニズムであった。続く第二段階 (ナカダ文化Ⅱ期前半) では、上下エジプト地域間で商業的な交換ネットワークが形成される。第三段階 (ナカダ文化Ⅱ期後半) になると、上下エジプト地域の交流はさらに集約的になり、ナカダ

文化の影響が下エジプトの遺跡で認められる。また、ナカダ文化による交易の統括が始まり、南レヴァントの交易品を得る目的から、下エジプト地域のデルタ地帯東部は中継地化へと導かれた。

こうした交換メカニズムの発展を前提条件として、ナイ

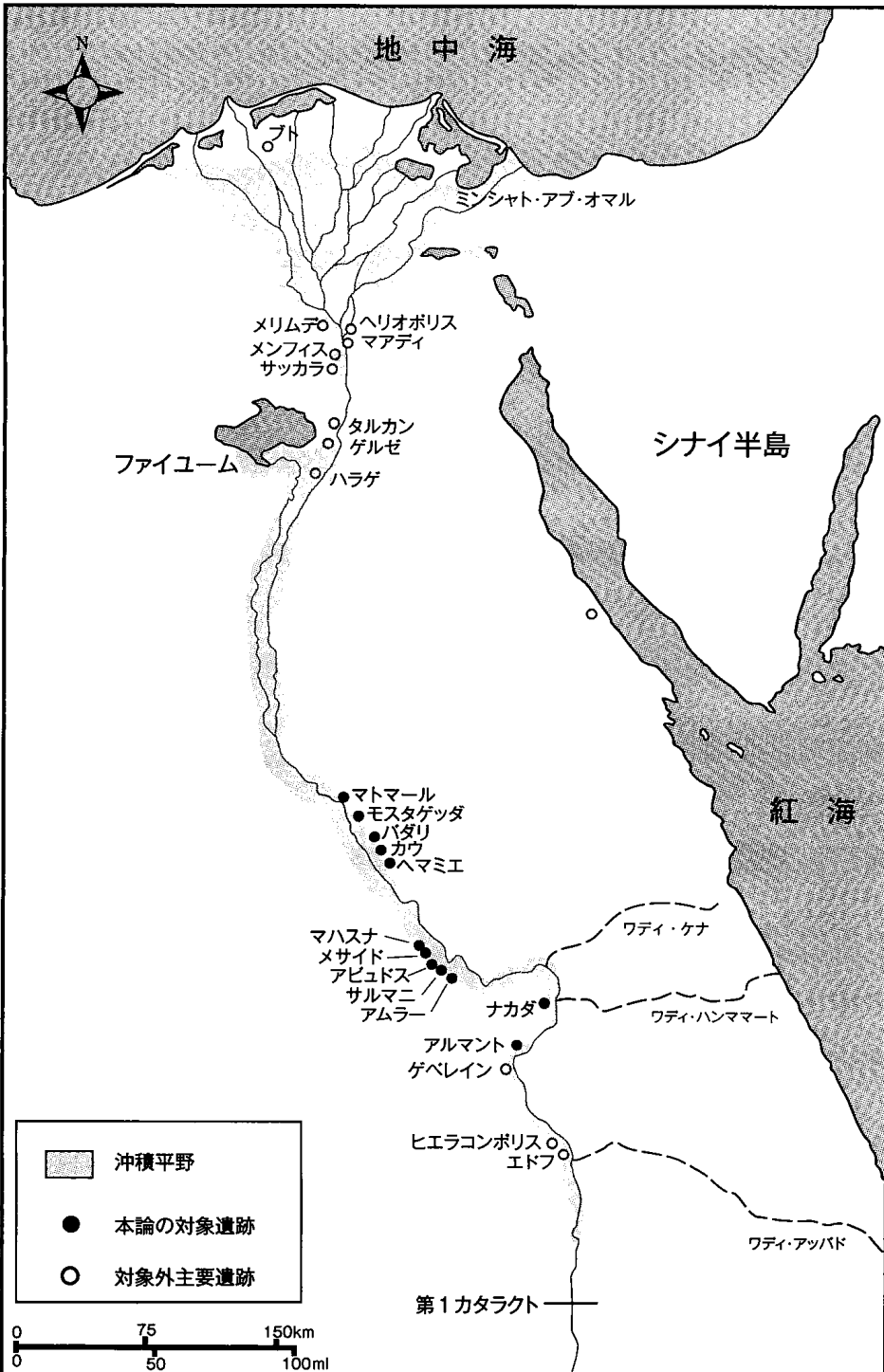


図 1：ナイル川下流域

ル川下流域は文化的・政治的な統合を果たし、単一国家が生成されるに至る。ケーラー (Köhler, C) は、上下エジプト地域間が接触を密にし、物質文化の統合が生じる背景の一つに物資や技術、思想の交換を挙げている (Köhler 2008)。つまり、文化的地域性の均質化は、物資や情報のやりとりのような地域間の相互作用を媒介とした所産である。ここでいう情報とは、諸遺物に反映される形態や文様の様式であったり、製作技術であったり、葬送にまつわる諸観念であったり、様々であっただろう。

一方で、当該期の核地域である上エジプト地域内部では、フィンケンシュタット (Finkenstaedt, F) による白色交線文土器の彩文研究 (Finkenstaedt 1980, 1981)、ホルムズ (Holmes, D.L.) の石器組成の遺跡間比較と技術伝統の研究 (Holmes 1989)、フリードマン (Friedman, R) による集落址出土土器の分析 (Friedman 2000) から、I 期後半までは地域間で文化的な独自性を保持していたが、ナカダⅡ期半ばを前後して、バダリ遺跡・アムラ遺跡・ナカダ遺跡・ヒエラコンポリス遺跡をそれぞれ中心遺跡とした四地域間で物質文化は均質的になることがわかっていく。土器・石器の形態や製作技術、素材選択といった情報は、地域間の人間集団あるいはそれに伴う物資の移動を成因として共有されたことが想定できる。例えば、フ・セマ

イネ地域のナカダⅠ期～Ⅱ期半ばの集落址から出土した磨石は、化学分析によってワディ・ハンママートで産出する流紋斑岩 (Rhyolite Porphyry)・玄武岩 (Basalt)・花崗岩 (Granite)・大理石 (Marble)・珪岩 (Quartzite) を素材としていたことがわかっている (Mahmoud and Bard 1993)。ワディ・ハンママートからフ・セマイネ地域までおよそ百五十 km あり、先王朝時代の上エジプト地域における広範囲な交換ネットワークの存在が指摘されている。

しかし、先王朝時代の文化的・政治的核地域である上エジプト地域内部における交換・流通に関しては、具体的に議論されているとは言えない。交換・流通は、あくまで「上エジプト地域」「下エジプト地域」という地域設定の間で論じられており、未だ「上エジプト地域」という枠組みから脱しきれいていないのである。上エジプト地域圏内における流通を論じることが、単に物資の移動によって地域間の接触を見るだけでなく、地域統合という当該期で重要な社会動態に迫ることができる。

考古学的に物資の流通を分析するためには、その地域周辺から獲得できない素材を用いた遺物を扱う必要がある。そこで小論では、採取地が限定される泥岩 (Mudstone) 製品を用いて、定量的な分析から当該期の流通形態の変遷を考察する。

すなわち、小論の目的は、①上エジプト地域内部における流通システムの変遷と、②さらにその発展と地域統合過程の並行関係についての二点を泥岩製品の分布状況から論じることにある。

3. 泥岩製品および泥岩について

3-1. 泥岩製品

先王朝時代では、泥岩を用いた多様な製品が副葬品として出土する。パレット (Palette)、符形製品 (Tag)、石製容器 (Stone Vessel)、そして石製腕輪 (Stone Bracelet) である (図2)。以下でそれら泥岩製品を概略して説明したい。

パレットは、泥岩製品としては最も代表的なものである。幾何学形や動物意匠など多様な形態をもち、薄い板状を呈する。孔雀石や方鉛鉱をすり潰して顔料にする目的に用いられるため、しばしばその表面上には使用痕や顔料の残滓を伴う。斑岩や石灰岩、トラバーチンから製作されたものも稀に出土するが、数例に留まるため、泥岩の板状に剥離する性質を好んでパレットの素材にしたと思われる。符形製品については諸説あるが、護符として扱われ、被葬者に対して保護的な役割を有していたと一般的に考えら

れている (Hendrickx and Eyckerman 2008)。また、符形製品は石灰岩やトラバーチン、角礫岩、そしてカバ牙や動物骨からも製作される。

続いて泥岩製容器であるが、先王朝時代に限れば、その出土は稀である。後続する初期王朝時代に、パレットの消失に伴って、石製容器にも泥岩が大量に用いられ始める。

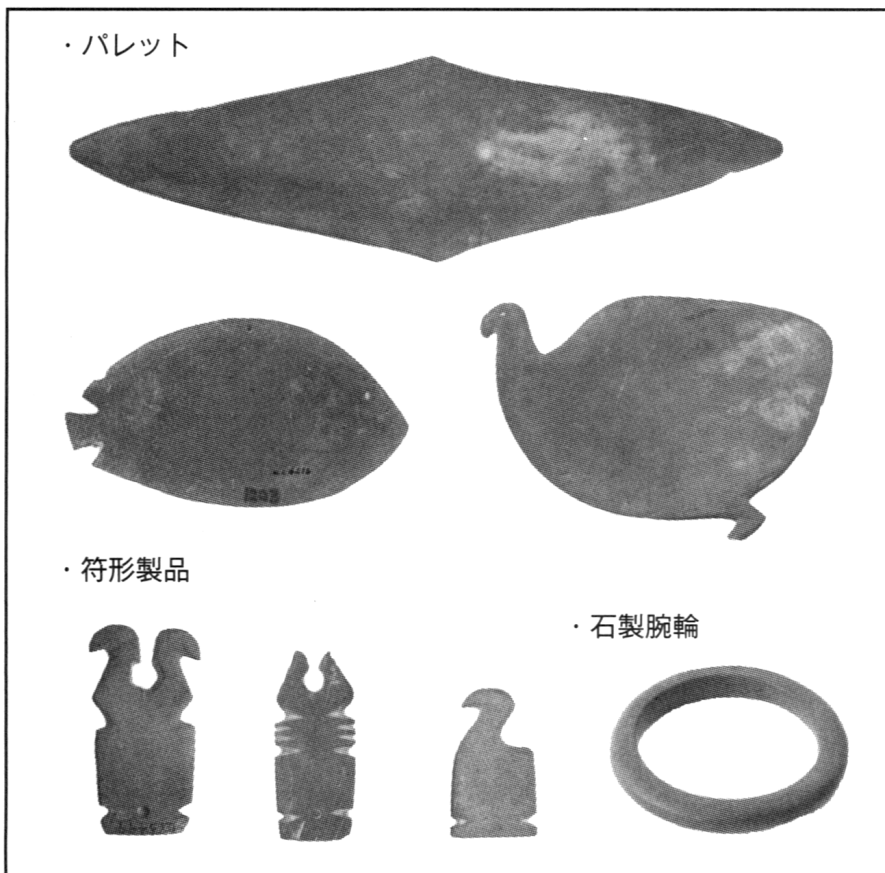


図2：泥岩製品一例

(スケール不同、泥岩製容器は写真資料が残っていないため掲載不可)

同様に、泥岩製腕輪の出土量も少なく、ナカダⅢ期以降に安定して出土するようになる。当該期の腕輪は、泥岩よりもカバ牙や動物骨、そして貝を素材とする方が好まれた。

3-2. 泥岩の原産地

素材となった泥岩は、東部砂漠⁽²⁾に位置するワデイ・ハンマートから主に産出するが、基本的に紅海丘陵上では広く獲得することができる (Klemme and Klemme 2008)。しかし、近年の泥岩製品の岩石学的分析によって、先王朝時代から初期王朝時代にかけてワデイ・ハンマートから産出する泥岩が獲得されていたことがわかっている (Aston 1993, Stevenson 2007)。それに加え、パレットを用いて生成される顔料の素である孔雀石や方鉛鉱もまた、ワデイ・ハンマート、あるいは少なくとも東部砂漠で獲得されたことが同位体元素比率の測定によって明らかとされている (Hassan and Hassan 1981)。おそらく、泥岩の入手に伴って、孔雀石や方鉛鉱もまた獲得されたのだろう。

ワデイ・ハンマート近郊に位置するナカダ遺跡では、先王朝時代の遺跡では最も豊富に泥岩製品が出土する。泥岩の産地は、ワデイ(涸れ谷)を通ってのみアクセスすることが可能であるため、こうした立地および出土量の二点

を勘案すると、当該遺跡の集団が泥岩を独占的に管理していたことが想定される。少なくとも、当該遺跡を基点として泥岩あるいは泥岩製品が流通していたという作業仮説を立てることが可能である (図3)。

泥岩製品は産地が限定されているため、考古学的に流通という現象を捉えやすい。それにもかかわらず、分類や編年の構築、副葬品としての象徴性に焦点を当てる一方で、分布論には未だ至っていない。ナカダ地域から拡散する泥

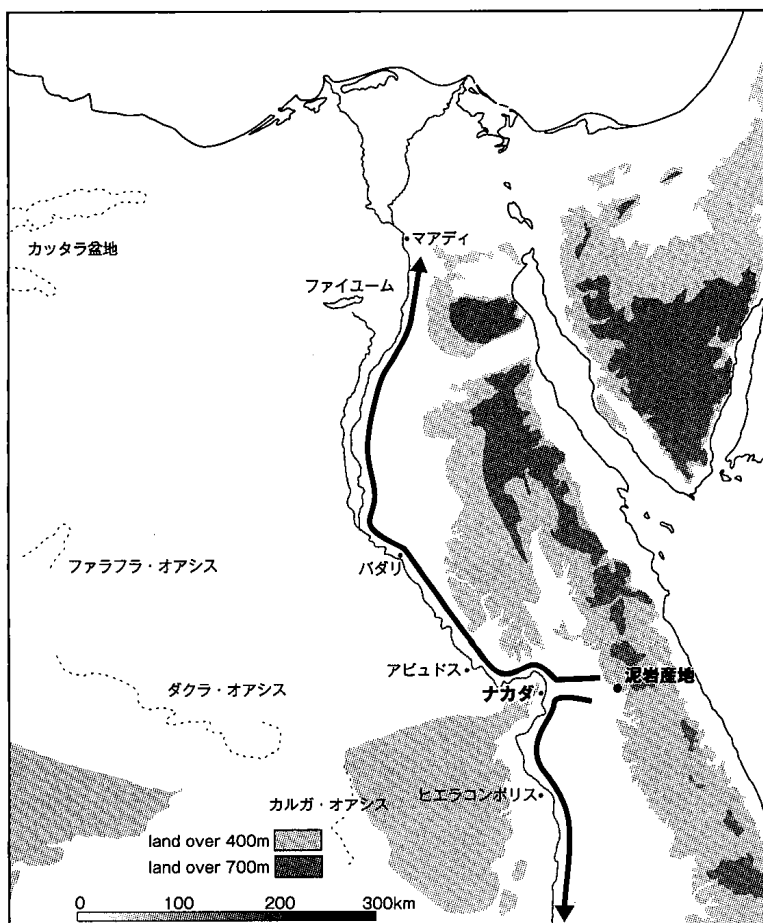


図3：泥岩製品の想定流通路

岩製品の分布様態を把握することにより、当該期の流通形態に迫ることができると考えられる。

4. 分析対象

4-1. 対象地域

小論の対象遺跡は、上エジプト地域に位置するアルマント遺跡、ナカダ遺跡、アムラ遺跡、サルマニ遺跡、アビュドス遺跡、メサイド遺跡、マハスナ遺跡、ヘマミエ遺跡、カウ遺跡、バダリ遺跡、モスタゲツダ遺跡、マトマール遺跡、計十二遺跡である(図4)。これら十二遺跡は全て墓地遺跡であり、小論で扱う資料も副葬品として墓から出土する。これらの遺跡は、ヘンドリックス(Hendrickx, S)による最新の土器編年を採用できるものに限った(Hendrickx 2006)。

また、十二遺跡は、ナカダ地域(アルマント遺跡、ナカダ遺跡)、アビュドス地域(アムラ遺跡、サルマニ遺跡、アビュドス遺跡、メサイド遺跡、マハスナ遺跡)、バダリ地域(ヘマミエ遺跡、カウ遺跡、バダリ遺跡、モスタゲツダ遺跡、マトマール遺跡)という三地域に区分する(図4)。特に先王朝時代の半ばまで、上エジプト地域内部の物質文化は、この三地域間で独自の様相を呈しているため、地域統

合の過程で地域的枠組みの変動はあるものの、地理的にこの三つがおおよそ境界区分として採用されている(Savage 2001)。分析に際しても、この区分に沿って進めていくこととする。

4-2. 分析資料

以上の十二遺跡から出土したパレット二百八十一点、符形製品十八点、石製容器二点、石製腕輪三点、計三百四点の泥岩製品が分析資料である。対象時期は、ヘンドリックス編年を採用し、IC期、IIA-B期、IIC-D期の三時期に区分して分析を行う。小論では、以下の分析項目を設ける。

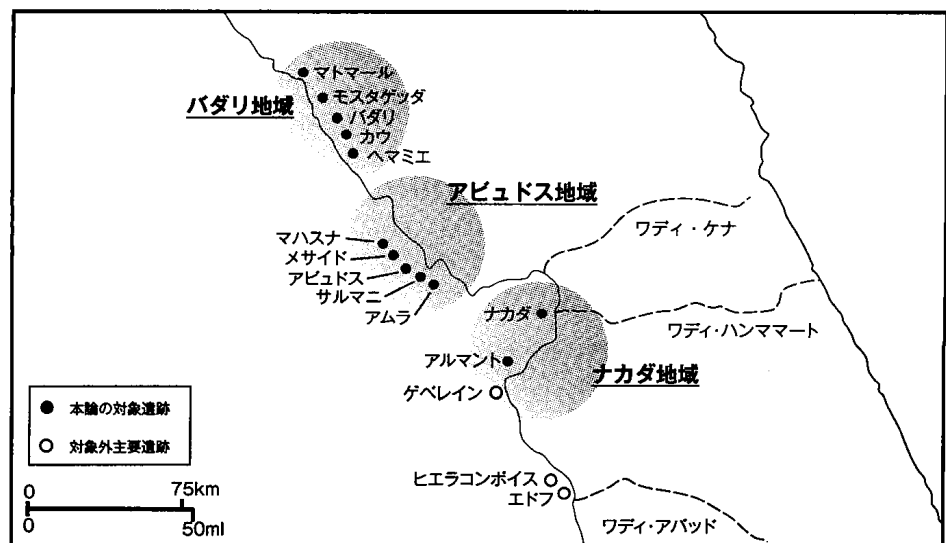


図4：上エジプト地域

- ①パレットの各遺跡の出土点数の分布
- ②パレットの各遺跡の出土点数と墓数の割合
- ③パレットの地域間の形態差
- ④その他泥岩製品の分布状況

①・②と③の分析において、発掘報告書上で形態を確認できない個体もあるため、両者で扱った資料数は一致しない。また、③の分析に先立ち、ここでパレットの形態分類を示す。パレットの形態分類は、ピートリ (Petrie, W. M. F.) がナカダ遺跡出土資料を分類して以降、大きな変更はない (Petrie 1896, 1920)。また、ピートリ以降の研究者も、過度に細分した分類案を踏襲しており、地域差を分析する際にはこうした分類は弊害となる。よって、編年が目的ではないため、小論の分析において、細かい属性を設けず新たに形態分類を行った (図5)。なお、不定形を呈するF6類は、報告書上で実測図がないため、図示していない。

先に示したようにパレット以外の泥岩

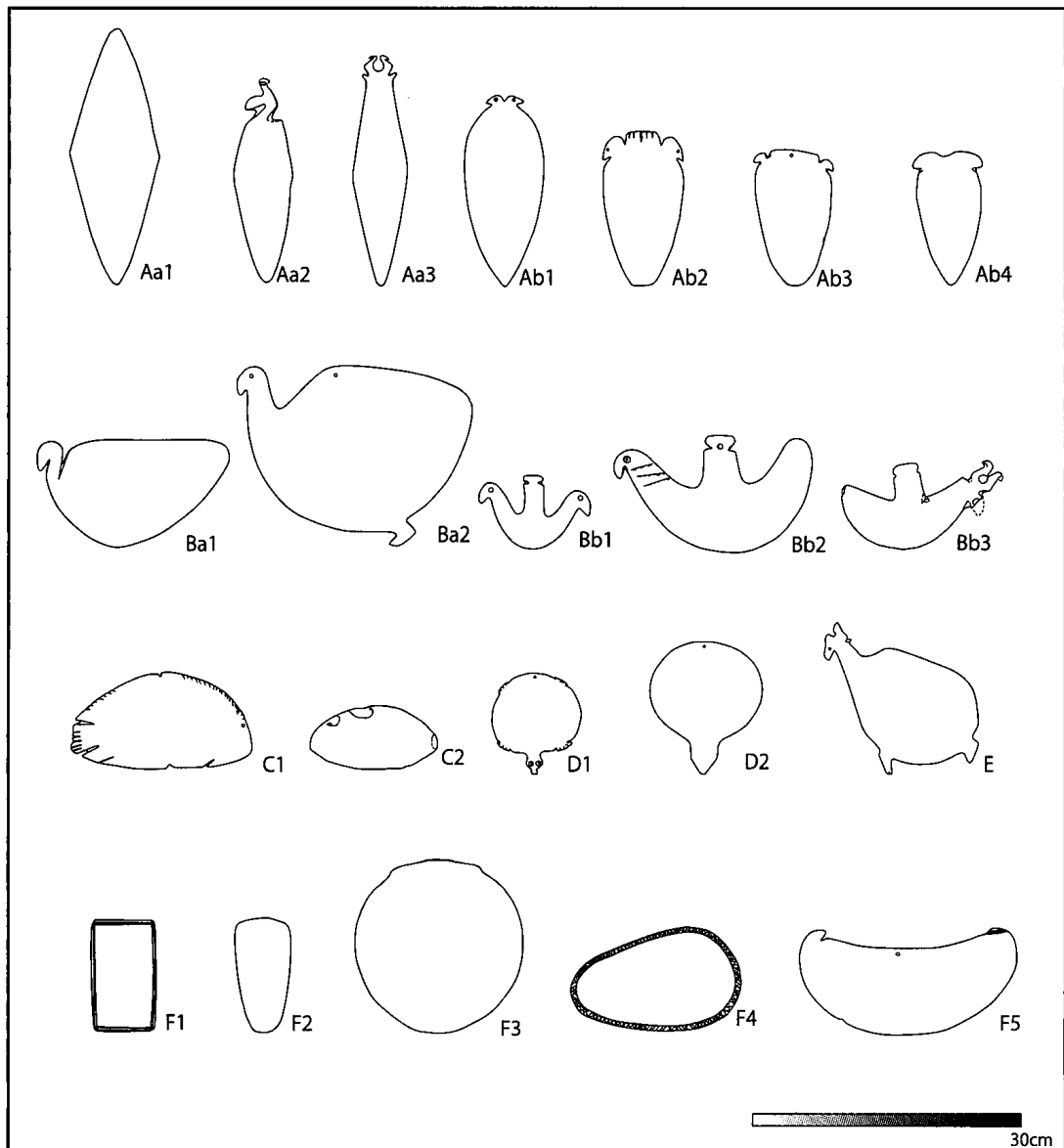


図5：小論のパレット形態分類

製品は極端に少なく、小論の分析の中心資料は、パレットである。したがって、④の分析では、パレット以外を「その他」として、量的な分布状況のみを観察する。

5. 泥岩製パレットの量的分布と形態分布

5-1. 資料と方法

小論における第一点目の分析は、パレット出土点数の遺跡間の分布状況に加え、各遺跡の出土点数と墓数の割合（以下出土割合）の分布状況である。出土割合は、各遺跡の純粋な需要を測るために算出した。例えば、出土点数のみでは、大規模な遺跡が小規模な遺跡よりも点数が多い場合、それは単純に墓数 \parallel 人口に比例した結果に過ぎない。そのため、より純粋な「需要」の物差しとしてこの値を用いる。また、各遺跡・時期ごとの全墓数は表1に示した。なお、グラフ上の遺跡の並びは、原産地近郊であるナカダ遺跡との距離に対応している。

第二点目の分析は、形態分布を先に示した分類に即して行う。なお、この分析では三地域区分の間で傾向を捉える。

5-2. 分析結果①

まずIC期では、九遺跡から合計六〇点出土した。ナカダ遺跡からマトマール遺跡まで徐々に減少する傾向が見られた。ナカダ遺跡が二十一点と最も多い。それに次ぐアルマント遺跡およびアビュドス地域の諸遺跡は十 \sim 五点と、概ね同数の出土を見せる。バダリ地域は、バダリ遺跡の三点を除き、それぞれ一点のみと少数である。出土割合については、ナカダ遺

表1：各遺跡・時期ごとの全墓数

地域	遺跡名	IC期	IIA-B期	IIC-D期	計
ナカダ地域	ナカダ遺跡	90	148	270	508
	アルマント遺跡	26	56	78	160
アビュドス地域	アムラ遺跡	16	30	49	95
	サルマニ遺跡	8	34	75	117
	アビュドス遺跡	14	7	36	57
	メサイド遺跡	-	2	6	8
	マハスナ遺跡	20	19	29	68
バダリ地域	ハマミエ遺跡	4	3	22	29
	カウ遺跡	3	8	19	30
	バダリ遺跡	5	15	76	96
	モスタゲッダ遺跡	2	13	83	98
	マトマール遺跡	24	100	57	181

量的分布 (図6)

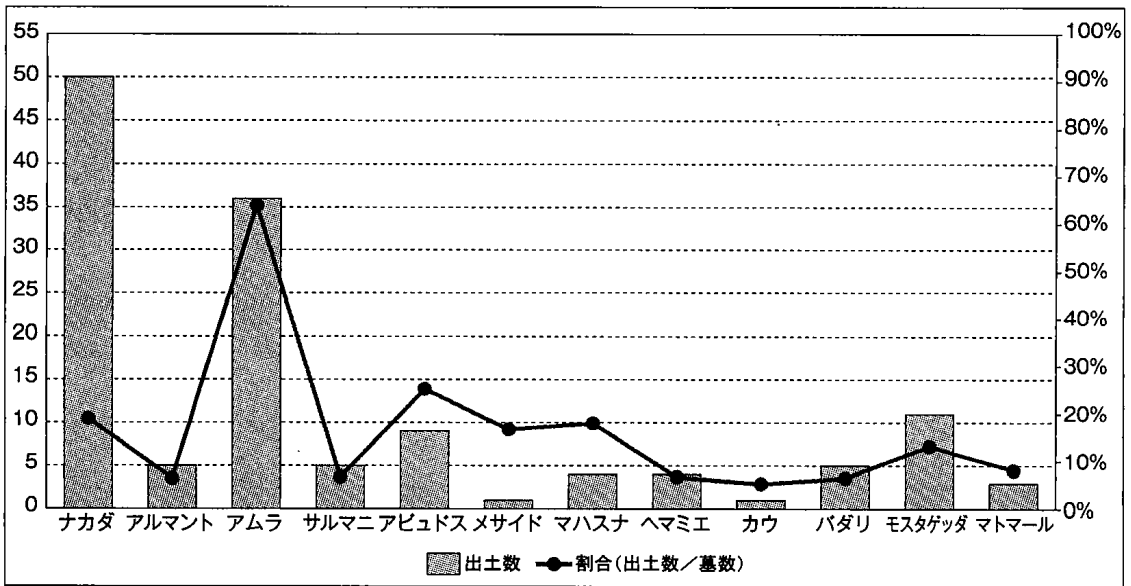
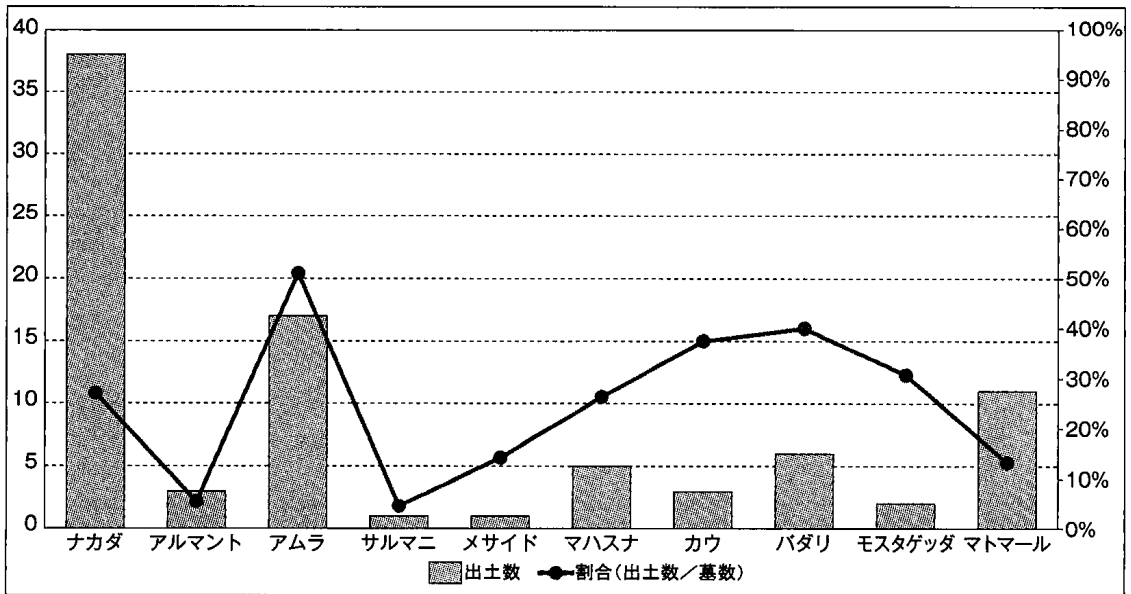
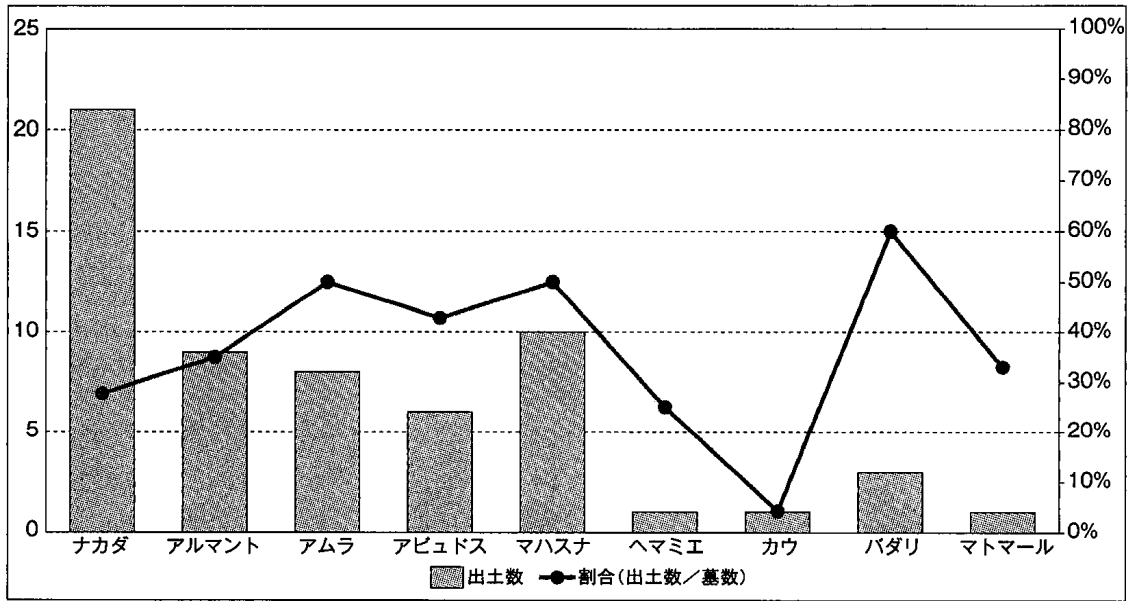


図6：パレット出土点数・出土割合（上：IC期、中：II A-B期、下：II C-D期）

跡の二十七・七％に比べ、アルマント遺跡三十五％、アムラ遺跡五〇％、アビュドス遺跡五〇％、マハスナ遺跡四十二・八％である。バダリ地域では、カウ遺跡で四・二％と極端に低く、出土点数が三点のみのバダリ遺跡では

六〇％である。特異な値を示すこの二遺跡を除けば、おしなべて遺跡間の偏差はそれほど大きくはない。出土割合については、出土点数の多少にかかわらず、両者は一致しないと言える。すなわち、ナカダ遺跡からマトマイル遺跡まで減少する出土点数に反し、出土割合にはその傾向は認められない。II A—B期には、一〇遺跡から合計八十七点出土した。グラフの見かけ上、前時期と同様にナカダ遺跡から減少する傾向にあるが、遺跡間の内実は異なり、出土点数・出土割合ともにナカダ遺跡とアムラ遺跡がそれぞれの地域内部で突出した値を示す。ナカダ遺跡の出土点数は三十八点と前時期より増加傾向にあるが、出土割合については二十七％で変わらない。しかし、アルマント遺跡がわずか五％であるため、ナカダ地域内部では比較的值は高い。アムラ遺跡では、十七点と五十一％で、出土割合は変わらず、出土点数は増加傾向にある。その他ナカダ地域のアルマント遺跡やアビュドス地域のサルマニ遺跡・メサイド遺跡・マハスナ遺跡は、極端に減少している。ナカダ地域とアビュドス地域に関しては、出土点数と出土割合は概

ね相関している。また、バダリ地域の出土点数は前時期より増加傾向にある。一方で、マトマイル遺跡を除き、バダリ地域の四遺跡は出土割合も四〇％前後とこの時期では比較的高い値を示す。

そしてII C—D期では、十二遺跡から合計百三十四点出土した。ナカダ遺跡五〇点とアムラ遺跡三十六点で、両遺跡の優位性はほぼ変わらず、前時期のナカダ・アビュドス両地域内部の遺跡間の関係性も変化は認められない。一方で、両遺跡の格差は前時期より縮まり、ナカダ遺跡の出土点数は増加傾向にあるものの、出土割合は十九％であり、減少傾向にある。アムラ遺跡の出土割合は六十四％で、この時期でさらに卓越することに留意する必要がある。バダリ地域については、ヘマミエ遺跡四点、カウ遺跡一点、バダリ遺跡五点、モスタゲツダ遺跡一点、マトマイル遺跡三点と、出土量自体は全体的に変化ない。しかし、出土割合に関しては、バダリ地域のほぼ全遺跡で一〇％を下回り、減少傾向にある。アビュドス地域のマハスナ遺跡を境とした出土割合のこの減少は特記すべきであろう。また、出土量自体も相対的に見れば、バダリ地域と他二地域との格差は広がる傾向にもある。

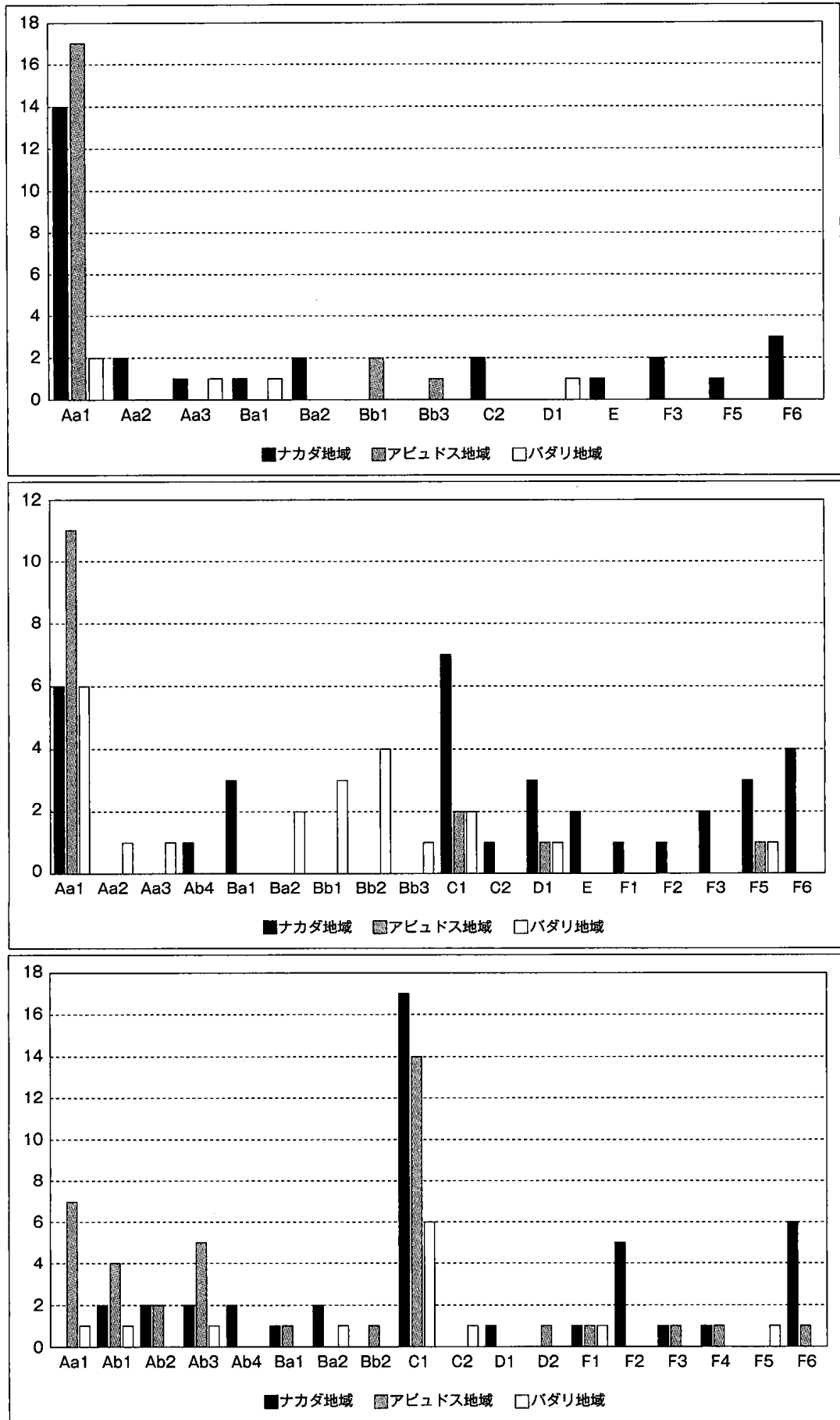


図7：パレット形態の地域差（上：IC期、中：II A-B期、下：II C-D期）

5-3. 分析結果② 形態分布(図7)

IC期では、まずナカダ地域が最も多様であり、F類において排他性が認められる。他二地域は、基本的にはナカダ地域の形態構成の内にあるバダリ地域はD1類と、若干の排他的な形態が出土と言えるが、アビュドス地域はBb1類とBb3類、でAa1類がバリエーションの主体として出土することは共通している。

II A—B期になると、バダリ地域がBb類において他二地域とは形態構成上大きな差異がある。前時期にアビュドス地域で排他的であったBb類が、この時期にバダリ地域で見られることは特記すべきであろう。また、F類がナカダ遺跡に集中する傾向はこの時期も強く認められる。一方で、アビュドス地域は、ナカダ地域の構成の内にあり、この二地域間の差異は完全に消失する。

最後にII C—D期であるが、この時期になると全体のバリエーションはさらに増加するものの、三地域で主体となる形態はC1類に移行する。アビュドス地域では、出土点数は減るが、IC期およびII A—B期と変化なくAa1類への指向性が強い。また、F類がナカダ地域で排他的な様相は崩れ、他地域からも出土するようになる。これらのことから地域間の形態構成上の差異はほぼ消失すると言つてよい。

6. その他泥岩製品の分布

三点目の分析は、パレット以外の泥岩製品である符形製品、石製容器、石製腕輪の各時期における分布状況である(表2)。これら泥岩製品は、出土点数自体少ないため、形態構成上の地域間の差異は見ない。

まず、IC期からII C—D期にかけて、その他泥岩製品はII A—B期をピークに、続くII C—D期では減少傾向が見られた。IC期では、符形製品のみ認められ、ナカダ遺跡六点、アムラ遺跡一点が出土した。II A—B期になると、アムラ遺跡のみ石製腕輪が認められた。しかし、II C—D期になると、ナカダ遺跡で二点のみ符形製品が出土し、全体の点数は減少する。一方、この時期から出土する石製容器は、バダリ遺跡のみ二点見られた。石製容器は、二点ともに管状把手が付

表2：その他石製品の分布状況

	IC期	IIA-B期	IIC-D期
符形製品	ナカダ遺跡=6, アムラ遺跡=1	ナカダ遺跡=7, アムラ遺跡=2	ナカダ遺跡=2
石製容器	-	-	バダリ遺跡=2
石製腕輪	-	アムラ遺跡=3	-
合計	7	12	4

いた壺形を呈し、当該期の器形としては典型的である。パレット以外の泥岩製品は、各時期を通して排他性を持っており、三遺跡でしか出土しない。

7. 小結 各時期の様相

以上の結果を受け、ここで泥岩製品の分布状況について時期ごとにまとめる。加えて、製品あるいは素材のどちらが供給されたのかという問題についても、流通システムを考察するに際して重要であるため、泥岩製品の生産遺跡が皆無であることからその判断は難しいものの、分布状況を総合的に検討し、推考してみたい。

I C期…原産地近郊のナカダ遺跡から離れることに出土点数は減少する。バダリ地域への供給量は、他二地域と比較して圧倒的に少ない。ナカダ地域の形態のバリエーションが、他二地域を概ねカバーすることから、当該遺跡で加工された製品として諸遺跡へ流通していた可能性が高い。F類がナカダ地域でのみ出土することは、おそらくF類以外の選定された形態が他地域へ流通していた。符形製品が、ナカダ遺跡で排他性を有することからも、その可能性を支持するだろう。

II A—B期…当該期のセンターであるナカダ遺跡とアムラ

遺跡で出土点数・割合ともに増加し、バダリ地域を除く他遺跡では減少する。パレットの分布は、前時期まで遺跡間の距離に応じたものであったが、当該期より一部の遺跡へ集中するようになる。明らかにアムラ遺跡へ供給量が増加することに伴い、アビユドス地域の他遺跡で供給量は減少する。符形製品がアムラ遺跡で出土し、泥岩製腕輪が排他的に現れることから諸遺跡との格差は広がる傾向にある。一方で、バダリ地域圏内では、そのような傾向は看取できない。ナカダ・アビユドスとバダリ地域間の量的分布の差異は、形態の地域差においても認識される。また、前時期のように製品だけがアビユドス地域へ持ち込まれた可能性は、アムラ遺跡の泥岩製腕輪の排他性から考えて支持しづらい。バダリ地域のパレットの形態に著しく差異が現れる点からも、ナカダ地域以外でも製品が加工されたと考える方が妥当である。つまり、パレットは、製品とともに、素材あるいは荒割りの段階の未成品も流通していた可能性がある。

II C—D期…引き続きナカダ遺跡とアムラ遺跡とともに増加するため、前時期と同じ様相にある。一方で、アムラ遺跡の供給量はさらに増加する。それに伴い、バダリ地域では出土割合は極端に減少する。全体的な出土点数は増加傾向にあるものの、ナカダ遺跡とアムラ遺跡とそれら以外の

遺跡との間の格差は大きく広がる。また、その他の泥岩製品は各遺跡で大幅に減少し、ほぼ見られなくなる。加えて、全体的なパレットの出土点数は増加傾向にあるため、泥岩の利用がパレット生産に一元化したことを示すと考えられる。また、この時期では、パレットの形態の地域差が消失するに伴い、F類が各地域で出土するようになる。前時期までF類がナカダ遺跡で排他性を有していたことを一種の「規制」として捉えるならば、II C—D期からはそのような状況は緩和されているように見える。これは、おそらく素材のみが各地域へ流通していたことを起因とした結果である可能性が高い。

8. 考察 流通システムの発展と地域統合過程

先の分析結果をもとに、各時期の流通システムの発展段階を捉え、地域統合過程や従来の交換・流通に関する研究成果を交えつつ、その実態を読み解きたい。

まず、全時期を通して泥岩製品がナカダ遺跡から徐々に減少する傾向は、やはり河川に沿って流通していたことを示すだろう。加えて、地理的にも低地砂漠や山脈といった自然障壁があること、ワディ・ハンママトからのアクセスに限定されていたこと、各地域間は政体領域上の競合関

係にあったため他地域の領土へは容易にアクセスできなかったこと、以上の点から、ナカダ遺跡以外の居住者による原産地への直接採取の可能性は否定される。したがって、泥岩製品あるいは泥岩の流通がナカダ遺跡を基点としていたという作業仮説は証明される。この前提に基づき、時期ごとに考察していく。

IC期では、原産地近郊から遠隔地へ徐々に出土点数が減少することから、任意に送られた泥岩製品が隣接遺跡から隣接遺跡へ運ばれたことを示す可能性にある。その際、ナカダ遺跡からは選定されたパレットが各遺跡へ流通したのだろう。先に挙げたグイヨーの研究で、並行する時期に上下エジプト地域間では「隣接地域から隣接地域への接触 (from neighbour to neighbour contacts)」が交換メカニズムの基本原理であったとしている (Guyot 2008: 712-715)。上エジプト地域圏内でも同じような原理で泥岩製品が流通していた可能性がある。当該期では、各地域が物質文化においてそれぞれ地域的な多様性を有していた。そのため、それほど地域間の交流も密なものではなく、組織性の低い単純な流通システムであったことが窺える。

II A—B期になると、ナカダ遺跡およびアムラ遺跡で出土点数・割合ともに突出する。両遺跡は、当該期のナカダ地域とアビュドス地域の内部においてそれぞれセンターで

ある。言い換えれば、それぞれの地域内部で遺跡の階層性に沿った分布のあり方を示す。地理学者のハブソン(Hubson, J.)によれば、遺跡規模の階層構造を伴う中心地システムに沿って、商品や情報は下方に移動するという(Hubson 1960)。厳密に言うと、アムラ遺跡に関してはアビュドス地域圏内のエリートが埋葬された墓地であったため、規模というよりもこうした政治的重要性からセンターとして位置づけられてきた。つまり、ナカダ・アビュドス地域では遺跡の階層性に則した流通過程で、少なくとも両地域内部では、センターが流通の管理統括を行っていたと考えられる。また、アムラ遺跡はナカダ遺跡に次ぐ第二の中心地であり、且つ、より北方の諸遺跡へ製品を送るための交易拠点であった可能性も否定できない。

当該期は、地域的エリートの出現によって、社会は階層化を迎える(Savage 2001; Castillos 2009)。ナカダ・アビュドス両地域は、上エジプトの核地域として結束力を強め、エリートを中心としたより集約的な交流があったと考えられる。一方で、バダリ地域は、先の二地域とは異なり、下エジプト地域と早い段階から接触があったため、文化的な混合領域であった(Köhler 1995)。また、ホルムズによる石器分析や馬場による黒頂土器の器形分析において、バダリ地域はナカダⅡ期になっても伝統性を保持して

いたと考えられている(Holmes 1989; 馬場二〇〇〇)。ナカダ・アビュドス核地域間では、いち早く文化的な統合が進行していたが、バダリ地域は地理的に上エジプト地域の北端部に位置するがゆえ、核地域との文化交渉や接触が緊密ではなかった。パレットの形態からも、バダリ地域にのみ地域差が現れる。バダリ地域は、こうした周縁部としての性格から、核地域間で組織立った流通網の外縁にあった可能性が高い。

そしてⅡC—D期には、全体的にパレットの出土点数が増加し、形態は多様化する。その他泥岩製品の減少傾向を併せて考えると、パレットの生産性の向上と供給量の増加が認められる。また、ナカダ・アビュドス両地域内部の遺跡間関係に変化は認められず、ⅡA—B期と同様に、遺跡階層に沿った分布状況を示す。一方で、バダリ地域では、出土割合が極端に減少し、またナカダ遺跡・アムラ遺跡と他諸遺跡の間の格差は広がっていく。この背景には、おそらくナカダ文化波及に伴い、下エジプト地域でナカダ文化の墓地遺跡が営まれ始めたことが挙げられる。ゲルゼ遺跡やミンシャト・アブ・オマル遺跡からは、上エジプト地域に比肩しうるほどのパレットが出土し、出土点数はバダリ地域を上回る(Petrie 1902; Kroeper, und Wildung 1994, 2000; Stevenson 2008)。つまり、バダリ地域より北方の下

エジプト地域へ指向した流通にあったため、結果的にバダリ地域への供給量が減少した可能性が指摘できる。アムラ遺跡の出土点数と割合がナカダ遺跡に比肩するほどに増大することも、北方への供給の増加から交易拠点としての重要性あるいは政治的なセンターとしての求心力が強まったことに由来するかもしれない。パッチ (Patch, D.C.) によると、II C—D期において、アビュドス地域の各集落は低部砂漠から沖積平野へ移動するという (Patch 2004)。この居住パターンの変化の要因の一つは、交易の重要性が増大したため、より河川近郊の居住を指向したことに求めることが可能であろう。ヒル (Hill, J.N.) も、先王朝時代中期から後期にかけて、出土遺物の組成からアムラ遺跡で下エジプト地域との交易関係が増大していたことを認めている (Hill 2010)。また、パレットの形態が多様化するにもかかわらず、地域差はほぼ認められなくなる。この時期に上エジプト地域内部では物質文化上の地域統合は達成されていた。つまり、三地域間でパレットの形態に関する情報は多元化しつつも、十分に共有できる地域間関係であったと考えられる。ナカダ文化の波及に伴い、泥岩製品および素材としての泥岩の流通が広域化し、それを支えるための地域間関係が上エジプト地域内部において構築されていたのだろう。

9. おわりに

小論では、泥岩製品の分布状況からナカダ文化における流通システムの発展を分析し、地域統合過程との並行関係を論じた。結果、II A—B期とII C—D期にそれぞれに画期を設定することができた。ナカダ・アビュドス間における文化的・政治的核地域の形成に伴う遺跡階層に沿った流通網が成立し、続いてバダリ地域より北方への需要の増加から下エジプト地域指向型の流通への変容にあった。II A—B期以降、地域統合の過程における核地域としてのナカダ・アビュドス地域とその周縁部としてのバダリ地域という関係性は、泥岩製品の流通システムからも認めることができる。これら一連の流れが、II A—B期以降に上エジプト地域圏内で首長制社会あるいは階層化社会へと変容した歴史的な背景と無関係ではあるまい。今後は、消費、すなわち副葬の段階も視野に入れ、ホダー (Hodder, J.) が指摘するように、遺跡・地域ごとの遺物の扱われ方と原産地からの距離の相関関係を精査する必要がある (Hodder 1982)。

最後に、泥岩製品、特にパレットが交換された意味について若干考えてみたい。

泥岩の産地であるワディ・ハンママートから産出する石材は、王朝時代ではベケン・ストーン (Bekhen Stone) と呼称され、頻繁に石材獲得のための遠征が王家主導の下で行われていた (Debono 1951)。新王国時代のトリノ・パピルスには、ワディ・ハンママートの地図が描かれており、当該地における石材資源の重要性を物語る (Harrel and Brown 1992)。後続する王朝時代の資料から、泥岩はこのように象徴づけられていたことがわかる。おそらく、先王朝時代でも重要な石材産地であったのだろう。

また、下ヌビアにおけるパレットは、花崗岩や閃緑岩、砂岩、珪岩といった地元で獲得できる素材が用いられた (Firth 1912, 1915)。これは、パレットの使用目的が、本来化粧用の顔料を作ることから日常的な利用にあったため、近郊で得ることができるとして石材が好まれたことを示す。下エジプト地域のマアディ遺跡においても、泥岩に加え石灰岩が用いられ、ヘリオポリス遺跡ではトラバーチンがパレットの素材となった (Debono and Mortensen 1988)。先行するバダリ文化期には、泥岩以外に石灰岩やトラバーチン、斑岩が多用されていた (Brunton 1937)。しかし、ナカダ文化における上エジプト地域内部では、とりわけ泥岩のみが好まれた。その理由は、灰緑色という色調が古代エジプトにおいて多産性や豊穡性を象徴すること (Ste-

venson 2007) に加え、産地や素材としての排他性・重要性から、交換価値が付与されていたことが考えられる。ナカダ文化は、時期が下るにつれて次第に分布領域を拡大し、地域統合を遂げる。そのためには、同盟関係の生成や地域間の社会紐帯の強化が必要となる。その際、交換価値が付託されていた泥岩製品は紐帯強化の手段の象徴的・戦略的資源として運用されたのかもしれない。

謝 辞

本稿は「二〇一三年度早稲田大学史学会大会」および *Current Research in Egyptology* XV, 2014. の口頭発表の内容に基づいている。

本稿の執筆にあたって、早稲田大学高等研究所の河合望先生や早稲田大学文化構想学部助教の馬場匡浩氏、早稲田大学文化構想学部助手の長屋憲慶氏には、発表の段階から多大な教示を賜った。ここに厚く感謝申し上げます。

註

- (1) 二十世紀初頭の発掘調査報告書では、粘板岩 (Slate) や片岩 (Schist) と表記されている。しかし、地質学的には泥岩 (Mudstone) 、シルト岩 (Siltstone) 、変成硬砂岩 (Metagreywacke) と呼称するのが正しい (Harrel 2013)。本稿では泥岩を用いる。
- (2) 東部砂漠はカンブリア紀に形成された地質であり、ナイル川下流域周辺や西部砂漠とは異なる地質にある。そのため、当該砂漠でのみ産出する岩石、特に火成岩や変成岩が多く見られる。東部砂漠の中部に位置するフディ・ハンママートは、ちょうどヌビア・フォーメーションの砂岩層にし、堆積岩が豊富に産出し、とりわけ泥岩が顕著である。
- (3) 先王朝時代の研究において、当該期の重要なセンターであったヒエラコンポリス遺跡を扱うことは望ましい。しかし、小論では最新の編年案であるヘンドリックス編年を適用できる遺跡に限ったため、ヒエラコンポリス遺跡を資料に加えることはできない。

参考文献 (発掘報告書含む)

- Brunton, G. 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*, London.
- Brunton, G. 1938 *Matmar*, London.
- Brunton, G and Caton-Tompson, G. 1924 *The Badarian Civilization and Predynastic Remains near Badari*, London
- Castillos, J.J. 2009 The Development and Nature of Inequality in Early Egypt, *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan*, vol.13, pp.73-81.
- Debono, F. 1951 Expedition Archeologique Ryale au Desert Oriental (Kefut-Kosseir): Rapport Preliminaire sur la Campagne 1949, *Annales du Service des Antiquites de l'Egypte*, vol.51, pp.59-110.
- Debono, F. and Mortensen, B. 1988 *The Predynastic Cemetery at Heriopolis: Season March-September 1950*, Mainz and Rhein.
- Friedman, R. F. 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hemamieh, Nagada, and Hierakonpolis*, Department of Near Eastern Studies, University of California, Berkeley, University Microfilms International, Ann Arbor.
- Friedman, R. 1999 Badari Grave Group 569, in W. V. Davies (ed.), *British Museum Occasional Paper 123*, pp.7-8, London.
- Ayrton, E. R. 1911 *Pre-dynastic Cemetery at El Mahasna*, London.
- Brunton, G. 1927 *Qau and Badari I*, London.

- Finkenstaedt, E. 1980 Regional painting styles in Predynastic Egypt. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 107: 116-120.
- Finkenstaedt, E. 1981 The location of styles in painting: White cross-lined ware at Nagada. *Journal of the American Research Center in Egypt* 18: 7-10.
- Firth, C.M. 1912 *The Archaeological Survey of Nubia, Report for 1908-1909*, Cairo.
- Firth, C.M. 1915 *The Archaeological Survey of Nubia, Report for 1909-1910*, Cairo.
- Guyot, F. 2008 The Origins of Nagadan Expansion and the Interregional Exchange Mechanisms between Lower Nubia, Upper and Lower Egypt, the South Levant and North Syria during the First Half of the 4th Millennium. In Midant-Reynes, B and Tristant, Y (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp.707-740, Belgium.
- Hantman, J.L and Plog, S. 1982 The Relationship of Stylistic Similarity to Patterns of Material Exchange, n Earle, T.K. and Ericson, J. E (eds.), *Contexts for Prehistoric Exchange*, pp.237-263, London and New York.
- Harrell, J. A. 2013 Ornamental Stones, *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, UC Los Angeles.
- Harrell, J. A. and V. M. Brown. 1992 "The oldest surviving topographical map from ancient Egypt (Turin Papyri 1879, 1899 and 1969)." *Journal of the American Research Center in Egypt* 29, pp.81-105.
- Hassan, A. A and Hassan, F. A. 1981 Source of Galena in Predynastic Egypt Nagada. *Archaeometry*, vol.23, no.1, pp.77-82.
- Hendrickx, S. 2006 "Predynastic-Early Dynastic Chronology", in Hornang, E., Krauss, R and Warburton, D. A (eds), *Ancient Egyptian Chronology*, Netherlands.
- Hendricks, S and Eyckerman, M. 2011 Tusks and Tags: Between the Hippopotamus and the Nagada Plant, in Midant-Reynes, B and Tristant, Y (eds.), *Egypt at Its Origins 3*, pp.497-570.
- Hill, J. D. 2010 *Interregional Trade, Cultural Exchange, and Specialized Production in the Late Predynastic: Archaeological Analysis of el-Amra, Upper Egypt*, The University of Pennsylvania, Ph.D. Thesis.
- Hodder, I, 1982 Toward a Contextual Approach to Prehistoric Exchange, in Earle, T.K and Ericson, J.E (eds.), *Contexts for Prehistoric Exchange*, pp.199-211, New York and London.
- Holmes, D. 1989 *The Predynastic Lithic Industries of Upper Egyptology*, UC Los Angeles.

- Egypt: A Comparative Study of the Libhic Traditions of Badari, Nagada, and Hierakonpolis*, Cambridge Monographs in African Archaeology 33, BAR International Series 469 (i), Oxford.
- Köhler, E.C. 1995 The State of Research on Late Predynastic Egypt: New Evidence for the Development of the Pharaonic State?, pp.79-91.
- Köhler, E.C. 2008 The Interaction Between and the Roles of Upper and Lower Egypt in the Formation of the Egyptian State. Another View, in Midant-Reynes, B. and Tristant, Y (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp.515-543, Peeters Publishers and Department of Oriental Studies, Belgium.
- Klemm, R. and Klemm, D.D. 2008 *Stones and Quarries in Ancient Egypt*, London.
- Kroeper, von. K und Wildung, D. 1994 *Minshat Abu Omar I Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 1-114*, Mainz.
- Kroeper, von. K und Wildung, D. 2000 *Minshat Abu Omar II Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 115-204*, Mainz.
- Mahmoud, A.M.A and Bard, K.A. 1993 Sources of the Predynastic Grinding Stones in the Hu-Semaneh Region, Upper Egypt, and Their Cultural Context, *Geoarchaeology*, vol.8, no.3, pp.241-245.
- Mallory-Greenough, L.M. 2002 The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels. *The Journal of Egyptian Archaeology*, vol.88, pp.67-93.
- Mond, R. 1937 *Cemeteris of Armant I*, Oxford University Press, London.
- Patch, D.C. 2004 Settlement Pattern and Cultural Change in the Predynastic Period, in Hendricks, S., Friedman, R., Cialowicz, K.M. and Chlodnicki, M (eds.), *Egypt at Its Origins*, pp.905-918.
- Petrie, W.M.F. 1896 *Nagada and Ballas*, California.
- Petrie, W.M.F. 1912 *The Labyrinthine Gerzeh and Mazghuneh*, London.
- Petrie, W.M.F. 1920 *Prehistoric Egypt*, London.
- Randall, D.M.C and Mace, A.C. 1902 *El Amrah and Abydos*, London.
- Rizkana, I and Seeher, J. 1988 *Maadi II ; The Libhic Industries of the Predynastic Settlement*, Mainz am Rhein, West Germany.
- Savage, S.H. 2001 Some Recent Trends in the Archaeology of

Predynastic Egypt, *Journal of Archaeological Research*,
vol.9, No.2, pp.101-155.

Stevenson, A. 2007 The Material Significance of Predynastic
and Early Dynastic Palettes, in Maris, R and Stevenson, A
(eds), *Current research in Egyptology 2005: Proceedings
of the sixth annual symposium which took place at the
University of Cambridge*, 6-8 January 2005, pp.148-162.

Watriin, L. 2003 Lower-Upper Egyptian Interaction during the
Pre-Nagada Period: From Initial Trade Contacts to the
Ascendancy of Southern Chiefdoms, In *Egyptology at the
Dawn of the Twenty-first Century: Proceedings of the
Eighth International Congress of Egyptologists*, Cairo,
2000, vol.2, edited by Zahi Hawass, Cairo: The American
University in Cairo Press, Cairo.

馬場匡浩 ニ〇〇二「エジプト・ナカダ文化における「黒頂土
器」の器形について」『エジプト学研究』第八号。

図表出典

図1～4、6、7 筆者作成。

図2 <http://petriecat.museums.ucl.ac.uk/search.aspx> から転載
一部改変。

図5 Brunton and Caton-Tompson 1924, Brunton 1938, Payne
1993, Kroeper and Wildung 1994, さらに筆者作成。

表1～2 筆者作成。